

【日中友好交流都市中学生卓球交歓大会報告書】

大会期日：令和7年8月3日(日)から8月8日(金)

開催場所：中華人民共和国北京市 北京体育大学体育館

宿泊場所：北京会議センター

参加日程：8月3日 訪中

8月4日 開幕式・練習

8月5日 予選リーグ・順位決定トーナメント1回戦・準決勝

8月6日 決勝・授賞式・中国国家青年卓球チーム選手と交流

8月7日 文化探訪・祝賀会

8月8日 帰国

競技成績 予選リーグ 第1試合 岐阜県・江西省 3-2 仙台市・長春市

第2試合 岐阜県・江西省 4-1 通州市・文京区

第3試合 岐阜県・江西省 0-5 石家床市・長野市

決勝トーナメント1回戦 岐阜県・江西省 2-3 長野県・上海市 ベスト8 優秀賞受賞

日中友好交流都市中学生卓球交歓大会が8年ぶりに開催されたことを大変嬉しく思います。コロナ禍で5年前は開催が見送られました。以前参加したときに比べ中国は大きく進化していました。それは、人々の生活に電子技術が導入され、通貨は電子マネーとなり、すべての情報はスマートフォンからアクセスできます。そんな中であって、中国では古い文化もリスペクトされ継承されています。日本と中国の交流は経済だけでなく、古くから文化交流も盛んに行われています。今後も更に両国の交流が深まっていくよう希望します。今回、江西省新余市から今後の交流について積極的に進めていただきたいとの要望を受けました。次回この大会は2年後に開催と聞いていますが、それ以外の交流も希望されています。実行予算をいかに準備できるかが課題ですが、今回、選手の輝く瞳と成長を見てみると、是非、実現できたらと考えます。本協会は以前、杭州市との卓球国際交流を行っていましたが、多額の経費がかかっていたため中止となりました。今後の再実施を課題にしたいと思います。

岐阜県卓球協会理事長 蓑島尚信

【日中友好大会に参加した感想】



私が日中交流交歓大会に参加して、最初は中国に行く決めて楽しみの半面不安という気持ちもありました。言葉が伝わらなくて迷惑かけちゃったり相手の選手が強くて全然歯がたたなくて練習になんかならないかも、と不安がありました。でも、一緒に行ってくれた先生方や葉太君に助けてもらったおかげで、少しずつ不安がなくなり

楽しいという気持ちが増えてとても楽しい思い出が作れました。なかなか団体戦に出場することができない環境にいるけど、今回の遠征で団体戦の楽しさ、悔しさをたくさん感じることができました。とんでもなく強い相手と戦ったのに自分が勝たなきゃいけなかったと自分のことを責めてた葉太君を見て団体

戦の一勝の重みを感じることができました。試合では初めて他国の人と戦うって聞いて色々不安になったけど、相手の選手も審判の方も優しく接してくれたので成長出来たかなと思いました。みんなでお買い物へ行った時は観光地とは違う現地の人の生活に根付いたスーパーに行くことができ、見慣れないお菓子やお土産を買うことができ、私にとっては貴重な体験になりました。中国へ行くまでに学んだ言葉は「謝謝」以外使うことはできなかったけど、ダブルスの時のサーブのサインを使うことができ、言葉は通じなかったけどコミュニケーションを取ることができたと思いました。この日中交流会で経験できたことをこれからも活かして生活していきたいです。

坂下中学校 2 年 北原愛唯



僕は、中国遠征を通じて、試合では、共に応援し合ったり、ダブルスで協力し合ったりする楽しさを感じました。他にも言葉が伝わらなくてもスマホの翻訳アプリを使って、中国の人と一緒に話が出来て友情関係を築けました。僕は中国遠征で、様々なことを学びました。僕にとってすごくいい体験になったと思います。この経験を活かしてこれからも卓球というスポーツでいろんな国の人と交流したりしてスポーツを楽しむだけでなく友情関係を築いたりして頑張っていきたいです。

萩原北中学校 1 年 星野葉太

日中交流中学生大会を通して、国を超えたとしても 1 つの目標に向かって努力する選手たちの姿が印象に残っています。言葉は違っても競技に一生懸命取り組む生徒の姿から私も国際交流の大切さを改めて実感できました。監督としてベンチに入り、日本の選手だけでなく、中国の選手にも通訳を通じてアドバイスしたり、共に食事をしたりすることで関わりをもつことができました。言葉で通じていたかは分からないところもありましたが、応援の声かけ、態度、リアクションなどから選手にも伝わっていたと思います。国は違っても監督として選手のためにできたことは、たくさんありました。また、中国の練習メニューなども見させていただきとても参考になりました。「打倒中国」と言われていますが、世界 1 位の中国選手が日々どういったことを大切にして練習しているかを知ることができました。この大会で得たことを自分のチームや生活に活かし、また更に精進したいと思います。

中島中教諭 水谷大悟

今回、日中友好交流都市中学生卓球交歓大会に参加し、生徒とともに大変貴重な経験をさせていただきました。これまで中国については報道や SNS などの情報を通して知ることが多かったのですが、実際に現地の方々と交流することで、その人柄や国民性を直接感じるすることができました。中国の選手や関係者の皆さんは礼儀正しく温かく接してくださり、生徒たちも安心して交流を深めることができました。また、世界のトップレベルの技術を間近で体験できたことは、選手として大きな刺激となっただけでなく、指導者である私にとっても非常に学びの多い機会でした。回転量や戦術の高さに触れ、生徒たちは自らの課題を認識し、さらなる向上心を持つようになったと感じています。大会全体を通じて、技術面だけでなく国際的な視野を広げる有意義な時間となりました。今後の活動に必ず活かしていきたいです。

羽島北高教諭 熊崎 健



日中友好交流都市中学生卓球交歓大会



観客席からも応援と歓声が飛び交った

開会式では、中国側を代表して中国人民対外友好協会の楊万明会長があいさつし、「皆さんこそが中日関係の未来。卓球の球は軽いが、そこには重い期待がかかけられており、小さな卓球台で繰り広げられるのは中日友好・アジア運命共同体の大きなビジョンである。」と語った。また中国卓球協会の王励勤主席も「卓球の球に乗せて交流を深め、試合の中では技術を磨き、試合の外では友好を育んで視野を広げてもらいたい」と述べた。日本側からは（公財）日本卓球協会の河田正也会長が「普段とは違った新鮮な機会。笑顔と尊重を忘れず、友好第一で戦い、様々な学びの場として価値ある大会に」とあいさつ。続いて前半団長を務めた当協会の川津隆副会長が登壇し、ピンポン外交の歴史を引

前大会から8年ぶり、8月4日より開催された日中友好交流都市卓球交歓大会。日中両国の友好都市同士がペアを組んでダブルスで競うという点が最大の特徴だ。スポーツでつながった絆は言葉の壁をもとめせず、わずか3日間の大会日程にもかかわらず、ペアとなった中学生選手同士には新たな友情が確かに芽生えていた。試合の中で重なり合う意識、日中両国の少年少女たちが言葉を発せずとも阿吽の呼吸でフォローストあうその姿に、日中友好の未来を見た。（文・写真 事務局次長 鈴木高啓）

日本側の選手宣誓をする神保蒼くん（東京）（8月4日）



劉詩雯、林高遠両元代表選手と楊会長、金杉大使による始球式（8月4日）

友情のラリー

熱戦を繰り広げ北京で交流



激闘のクライマックスとなった決勝戦。写真は長崎県一湖北省チーム対 神戸市一天津市チーム（8月6日）

開会式後は各チームに分かれ、初めての顔合わせを済ませた後、練習が行われた。開会式で選手宣誓をした神保くんは、選手宣誓について「とても緊張した。本番では頭が真っ白にならず、視線がずっと下を向いてしまった」と語りな

る」と語った。また中国卓球協会の王励勤主席も「卓球の球に乗せて交流を深め、試合の中では技術を磨き、試合の外では友好を育んで視野を広げてもらいたい」と述べた。日本側からは（公財）日本卓球協会の河田正也会長が「普段とは違った新鮮な機会。笑顔と尊重を忘れず、友好第一で戦い、様々な学びの場として価値ある大会に」とあいさつ。続いて前半団長を務めた当協会の川津隆副会長が登壇し、ピンポン外交の歴史を引

球協会の河田正也会長が「普段とは違った新鮮な機会。笑顔と尊重を忘れず、友好第一で戦い、様々な学びの場として価値ある大会に」とあいさつ。続いて前半団長を務めた当協会の川津隆副会長が登壇し、ピンポン外交の歴史を引

いて「試合を通して互いを認め尊重しあい、国境を越えた友情を。スポーツマンシップは勝敗より大切であり、言葉の壁を越えて思い出深い滞在としてほしい」と選手たちを激励した。また来賓からは在中国日本大使館より金杉憲治大使があいさつし「今日は国境を超えて協力し勝利を目指す中で、お互いを理解する絶好の機会。リアルな経験を大事にして両国、地域、世界の発展に貢献を」と述べた。

その後、楊会長が開会宣言を行い、各来賓のあいさつに続いて神保蒼くん（東京）と丁沫含さん（北京）による選手宣誓が行われ、友好第一の精神とスポーツマンシップに則った大会での奮闘が誓われた。続くデモンストレーションでは、元代表選手の劉詩雯さん、林高遠さんとともに、楊会長と金杉大使による始球式も行われ、その後両元代表選手による模範試合も行われた。

がら、本大会への意気込みについては「バックハンドの調子がいいので、シングルスはうまくいきそう。調子を崩さないようにしたい」と前向きな抱負を述べ、練習を通じたチームメイトの印象については「（日中男女混合）ダブルスでは、右同士で組むのは初めて。明日の本大会に向けてうまくやっていきたい」とし、「シングルスでは自分のプレーを、ダブルスでは相手に迷惑をかけないようにしたい」とチームメイトを気遣う様子も見せた。

また、卓球台の下では言葉の壁を越えたサインが交換され、スポーツという非言語交流の威力を見せつけられた。さらに各台では声援と拍手も飛び交い、とりわけ長崎県一上海市チームの秀坂来哉くん（長崎）の雄々しい咆哮が注目を集めていた。



決勝進出をかけた予選ブロック。決勝に駒を進められるのは約半数（8月5日）

熱戦の火ぶたが切られた5日

翌5日からは全42チームが3ブロック4組に分かれて予選リーグが開催された。各ブロック全チームが次々と対戦し、その中でナイスプレーをしたチームメイトとは、今や大会恒例となった国境を越えたハイタッチも各所で見られ



整列して入場する選手たち。大会本番に向けて緊張が走る（8月5日）

決勝トーナメント第1試合（準々決勝）は、各ブロックとも予選以上の熱戦が繰り広げられた。第3ブロックの高知市一蕪湖市チームと岐阜県一江西省チームは、勝敗が第5試合男子シングルスまでつれ込む接戦となった。蕪湖市の楊文傑くんはこの9月から高校生になる中学3年生、今大会トップクラスの長身とがっしりした体格。一方江西省チームの劉峙頌くんは中1で、小学生の時は全国大会にも出場経験があるが、今大会最小クラスの体格。この体格差も中学生大会ならではの。両チームの対戦は第4試合女子シングルスまでで2対2となり、最終第5戦で前述の劉くんの登場となった。対する高知市一蕪湖市チームは

中島遙斗くん（高知）。中島くんの冷静かつ果敢な試合運びに、さしもの小さな巨人もペースを乱されミスを連発、悔し涙に濡れた。結局最終戦は高知市一蕪湖市チームが制し、準決勝へと駒を進めることとなった。

高知市引率の横田健氏は33年前の92年12月、43歳の時に夫婦で本卓球大会に選手として出場した経験を持つ、今大会屈指のベテラン大会OBである。「参加当時相手チームの責任者だった方の息子さんが高知大学に留学することとなり、お世話もした」と、大会後も友情と交流が続いたことを懐かしそうに語った。一方で中国の変貌ぶりには「当



試合の途中にはコーチや監督からアドバイスも。写真は下関市一青島市チーム（8月6日）

その後大会2日目は準決勝まで試合が進められ、最終日に向けて各ブロック2チームずつ、合計6チームが決勝戦に向けて出揃った。

四日市一天津市対船橋市一西安市の対戦も第5戦まで勝敗がつかない接戦となり、決勝トーナメントの厳しさを物語っていた。

2025 年日中友好交流都市中学生卓球交歓大会
参加チーム一覧（成績順）

【優勝】
下関市一青島市、神戸市一天津市、高知市一蕪湖市
【準優勝】
大分市一武漢市、長崎県一湖北省、長野市一石家荘市
【三位入賞】
上田市一寧波市、秋田県一甘肅省、四日市市一天津市、奈良県一陝西省、三重県一河南省、水戸市一重慶市
【第一ブロック】
東京都一北京市、松江市一銀川市、松江市一吉林市、松本市一廊坊市、北九州市一大連市、戸田市一開封市、石狩市一彭州市、徳島県一湖南省、長崎県一福建省、須坂市一四平市
【第二ブロック】
高岡市一錦州市、浦添市一泉州市、長野県一河北省、宇部市一香港特区、山形市一吉林市、厚木市一揚州市、新宿区一東城区、岡山市一江西省、飯山市一福田区、香港和僑特別チーム
【第三ブロック】
長崎県一上海市、佐渡市一塩城市、徳島市一丹東市、諫早市一漳州市、別府市一煙台市、岐阜県一江西省、文京区一通州市、仙台市一長春市、船橋市一西安市、東近江市一常德市

〈主催〉公益社団法人日本中国友好協会、公益財団法人日本卓球協会、中国人民对外友好協会、中国日本友好協会、中国卓球協会

〈後援〉日本外務省、日本スポーツ庁、日本総務省、一般財団法人自治体国際化協会

〈支援団体〉北京市人民对外友好協会、中国友好平和発展基金会、北京市卓球スポーツ協会、日本国際協力センター

〈協賛団体〉 全日本空輸株式会社 (ANA)

卓球は両国をつなぐ架け橋
下関市―長春市チーム
王姿涵さん(長春)

今大会に参加し、チームメイトと優勝できたことを嬉しく思う。この栄誉はチームが一丸となった証であり、中日友好の証でもある。

今大会では好成績だけではなく、日本の友人たちと知り合えたことが忘れられない思い出になった。

勝利はゴールではなく、新たなスタート
神戸市―天津市チーム
王浩宸くん(天津)

勝利はゴールではなく、新たなスタート。これからもうこうした交流の機会を大切に、日本のチームと切磋琢磨しあいながらさらに強く一緒に成長していきたい。

卓球は中日友好の大切なピンポン玉を通して知り合えた。

卓球は単なる競技ではなく両国をつなぐ架け橋。卓球の試合では忍耐、競技を通してお互いを理解し、友情を深めることができた。助け合い、励まし合いながら見事に優勝を勝ち取ることができた。

中日両国の発展と友情がこれからも続くことを願っている。

たくさんの人と出会えて本当に良かった

高知市―蕪湖市チーム
中島運斗くん(高知)

この大会に参加できて本当に光栄。中国の人と試合できる機会はめったになく、初めてだった。日本人とは違う強さに驚いた。

開会式では中国卓球界の有名選手が来てくれたことが嬉しかった。中国のプレイヤーとも交流し、その優しさや面白さを知った。日本とは違った料理や文化も知った。

今大会に参加し、いろいろなことを経験し、たくさんの人と出会えて本当に良かった。今大会のすべての関係者、たくさんの方のアドバイスをくれた蕪湖市のコーチにも感謝したい。

決勝トーナメント



下関市―青島市チーム



神戸市―天津市チーム



高知市―蕪湖市チーム

第一ブロック

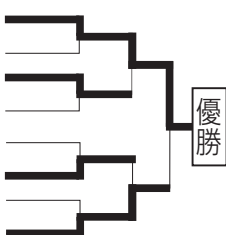
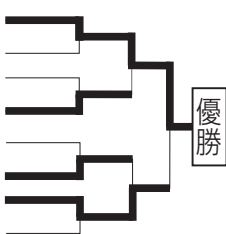
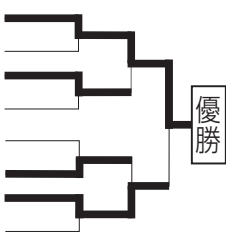
下関市―青島市
長崎県―福建省
上田市―寧波市
北九州市―大連市
松江市―銀川市
奈良県―陝西省
大分市―武漢市
徳島県―湖南省

第二ブロック

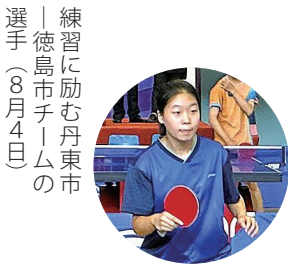
神戸市―天津市
宇部市―香港特区
岡山県―江西省
秋田県―甘肅省
長野県―河北省
三重県―河南省
長崎県―湖北省
飯山市―福田区

第三ブロック

高知市―蕪湖市
岐阜県―江西省
四日市市―天津市
船橋市―西安市
別府市―煙台市
水戸市―重慶市
長崎県―上海市
長野市―石家荘市



閉会式であいさつする、当協会の宇都宮会長(右)と中日友好協会の程永華常務副会長(8月6日)



練習に励む丹東市―徳島市チームの選手(8月4日)

心を結んだ

日中混成42チームの中学生

ナルチームのメンバーとして再会されることを夢見ていたと希望を語った。続いて中日友好協会からは程永華常務副会長があいさつし「大会期間中の短い期間に選手たちは言葉の壁を越えて理解を深め、多くの感動を生んだ。皆さんは中日両国の希望であり、友好の信念を固く持って交流を深め、友情を育んでほしい」と期待を込めた。

北京冬季五輪
会場見学

大会終了後の7日には、市内の観光と祝賀レセプションが行われた。残念ながら前日まで内モンゴル・河北省を中心に降った大雨の影響で、期待されていた万里の長城へ入ることができなくなり、同地への見学は断念されたが、代わりに2022年北京冬季五輪の会場となった首钢スキー大ジャンプ台と首钢園、通州区副都心を見学した。

首钢スキー大ジャンプ台及び

び首钢園は1919年に設立された首都鋼鉄集団有限公司の工場跡地に建設された施設である。同工場は環境汚染対策の理由から2008年の北京夏季五輪前に河北省へ移転されており、その跡地が冬季五輪会場及び産業遺産博物館として整備されたもの。ジャンプ台はエレベーターで頂上まで登ることができ、選手の子供たちはその高さで観客席との意外な近さに驚いていた。

通州区副都心は、北京の人口過密や大気汚染等解消のために2015年に策定された

副都心開発計画によって、北京市の中枢機能が通州地区へ移転されたエリアであり、同地区内には各種政府機能のほか、芸術センターや大運河博物館、北京市立図書館なども設置されている。今回はこのうち芸術センターと大運河博物館を中心に見学した。見学は公演や展示を見学するというよりも、設備の見学がメインではあったが、博物館見学では同施設内に設置された文創販売エリアで、参加者全員が数少ないお土産購入の機会を楽しんだ。



会場となった北京体育大学体育館。卓球台が敷き詰められ、熱気に包まれた

夕刻からは国家会議中心へと舞台を移し、大会日程を締めくくる祝賀レセプションが盛大に開催された。オープニングでは獅子舞が踊り、各テーブルを回ってパフォーマンスを繰り広げたほか、後半には人気の川劇「変面」も披露され、会場を大いに盛り上げていた。

最後の交流となった祝賀レセプション

レセプションでは中国人民対外友好協会より袁敏道副会長が今大会を振り返り「激しくも心温まる大会。努力・協力・熱意と友情によって新たな中日民間友好交流が生まれた」と大会の成功を喜び、続いて神戸―天津に始まる友好都市交流の歴史を振り返りながら「青少年の皆さんこそ友好交流の主役。百聞は一見に



今大会最後の交流の場となった祝賀レセプション(8月7日)

如かず、SNSなどの情報に流されることがなく、中国の映像の姿を見て、友好交流の物語を彩り豊かに。友好を世代々に引き継いでほしい」と期待を述べ、次回大会での再会を呼び掛けた。続いて当協会の宇都宮会長が登壇し、大会の歴史を振り返りながら「今年には戦後80年、協会設立75周年。今世界は大きな混乱期にあるが、日中両国は手を携え、相互理解を推進し、世

界平和と両国関係の健全かつ安定的な発展を」と呼びかけ、「当協会は今後も友好交流の子々孫々、世代々々の発展のために努力する」と改めて未来への決意を語った。続いて壇上に立った全日空(ANA)の上席執行役員・中国総代表の中原伸二氏は、日中両国のペアが言葉以上の信頼を築いていく姿に「スポーツのすばらしさと若者の無限の可能性を感じた」と大会を振り返りながら「ANAは空を通じて人と人、国と国をつなぐことが使命、こうして青少年同士が異文化理解を深める機会是我々の理念と一致している」と今後の支援継続を前向きに語り、選手に対しては「今大会の経験をもとにスポーツと友情を大切にしてほしい」と呼びかけた。